

国語

→ 中・高学年 | 「ことばの学習」

「伝統文化になれ親しむ」

～年間を通して育みたい言語感覚～

1. 伝統文化に親しむとは

指導要領の改訂を受けて、平成 27 年度版の各社教科書では、これまで中学校で扱われてきた古典や漢文なども紹介され、様々な形で伝統文化に親しませるための工夫がなされました。

これまでも「五七五」のリズムに親しむ学習や、高学年で「百人一首」を題材とした単元もありましたが、その扱いにはさらなる工夫が求められます。

また、伝統文化に親しみをもちたせるということの意味は、ただ古典を扱えばよいわけではなく、昔から変わらぬ日本人特有の価値観や季節感などを共有、共感することが大切だと考えています。

2. 月の初めや、折節に触れて、作品を紹介する

ひさかたの 光のどけき 春の日に
しずこころなく はなのちるらむ
紀 友則

名月を とってくれよと 泣く子かな
小林 一茶

これらの和歌や俳句は、これまでも教材として採りあげられてきた作品ですが、古典の単元としてまとめられているのが一般的です。先の和歌には、「春の立ちける日によめる」という詞書があり、昔の立春の歌だとわかります。また、一茶の俳句は、「名月」という季語から秋の句であるとわかります。

このような作品をいくつも用意しておき、時期を見て、折に触れて紹介するようにしています。「こんな寒い時期に、花なんて咲いてないよ。」「月がきれいなのは、秋だけじゃないのに。」

自分たちの生活実感と合わせて、昔の人々の思いに触れることに価値があると考えているからです。

3. 年間計画の中に帯単元として位置づける

年間を通しては、次のような取り組みが考えられます。

① 日々の音読や暗唱のための学習材のひとつとする。

② 学級通信や国語だよりなどを活用する。

季語の紹介や、その時期にあった句、月の異名、作品などを載せて、若干の解説を添えておきます。朝や帰りの会の数分で扱うこともできますし、保護者の方にも理解と協力をいただくことも増えます。

③ 四季に応じて句会や連歌の会を設ける

最初だけは説明の時間が必要ですが、一度行っておけば、あとは年間を通して行えます。パソコンを活用して、作者名をふせて打ち込ませれば、意外性も加わり、さらに盛り上がります。

④ 作文のタイトルを五七五でつける

物語の初発の感想や、行事などの作文を書く際に、五七五でタイトルをつけさせます。短い言葉で言い尽くそうとすることで、主題が焦点化され、要約力のトレーニングにもなります。



学習単元として、ある程度まとめて学ぶ必要もありますが、このように、伝統文化に触れ、親しみをもちたせる手立ては様々な工夫できると思います。